

最後のオカノエ講

～行田市大字埼玉百塚中組の庚申講～

田中裕子

1 オカノエは「お茶飲み講」

「オカノエ様の掛け軸をもらってこないか。」という話があったのは、平成7年（1995）の春のことである。「オカノエ様」とは庚申様のこと、つまりは庚申講の掛け軸の寄贈申請である。

さきたま風土記の丘にほど近い行田市大字埼玉百塚中組では、平成7年まで庚申講が継続して行なわれてきた。しかし、講中の高齢化が進むにつれて存続が難しくなり、行事の終息を余儀なくされることになった。そこで、問題になったのが当講で伝承してきた掛け軸の取り扱いである。少なからず信仰の対象であったものを、講員の誰かが代表して保管していくことにもためらいがあり、結果として当館へ寄贈したい旨の申請があったという次第であった。

埼玉百塚中組では庚申講のことを「オカノエ講」と呼んでいて、「訳は知らないけど、夜中までただ世間話をしていればいいんだ。」といわれていた。このことが、オカノエ様を別名「お茶飲み講」と称している理由でもある。火難除けのために集まるのだという話も聞いたことがあるという。盛んな時期には、最高で11人もの講員がいたこともあるということで、講の当日皆が集まるヤドは、籤で順番が決められた。

オカノエの夜は、講員がヤドに集まり、掛け軸にうどんや煮物などの御馳走を供えて手を合わせ、一同で食事をともして楽しく過ごすのである。賄いは「ヤド賄い」といってヤドが用意したものである。その献立は、おこわを蒸かしたり、うどん・天麩羅・煮物などの精進料理であった。夕飯を食べて12時を過ぎたら、さらに赤飯とか混ぜご飯を振る舞ったこともあったという。

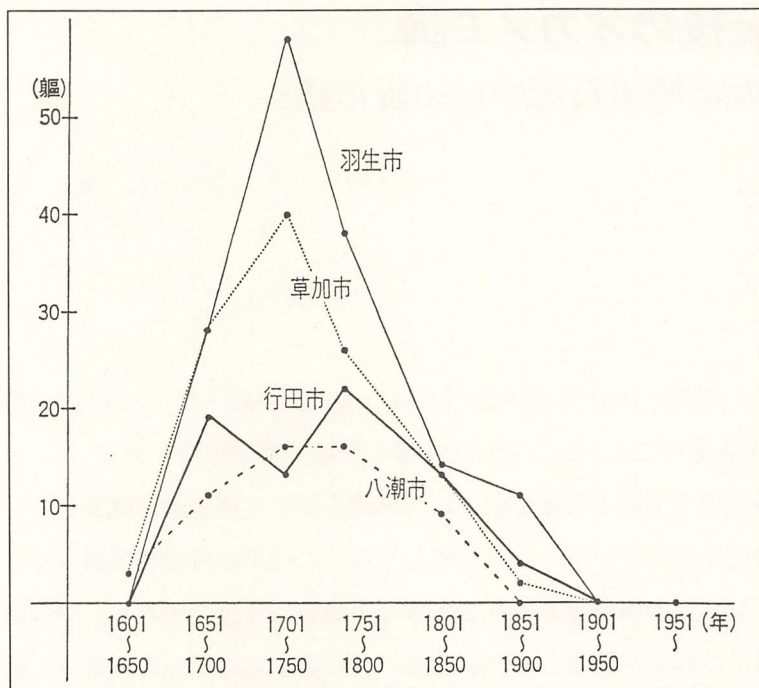
近頃は午後10時には解散してしまうが、昔は午前2時から3時まで集まっていたという。こんなふうに近所の者



外箱を新調して寄贈された



寄贈された庚申講掛軸



庚申講の年代別造立数 (低地)
 新編埼玉県史 別編2 民俗2
 昭和61年 埼玉県
 P.69 から転載

左の表によると、行田市内の庚申塔の年代別の造立数では、18世紀の後半のものが最も多いとされている。この百塚上組でももとは庚申塔があったという。

がじっくりと集まる機会是他になかったので、決めごとをするのには好都合だったという。

ここでも、深夜の12時を過ぎてから地震が来ると、翌日ヤドをもう1度やらなければならないという決まりがあった。この時ばかりは、ヤドの負担軽減のため各自が米を5合持ち寄ったそうである。このような言い伝えはあるものの、行事そのものが形骸化していて他のことについては残念なことにほとんど採集することができなかった。

例えば、「人間の身体に三尸という虫がいて、庚申の夜人が眠っている間に抜け出して昇天し、

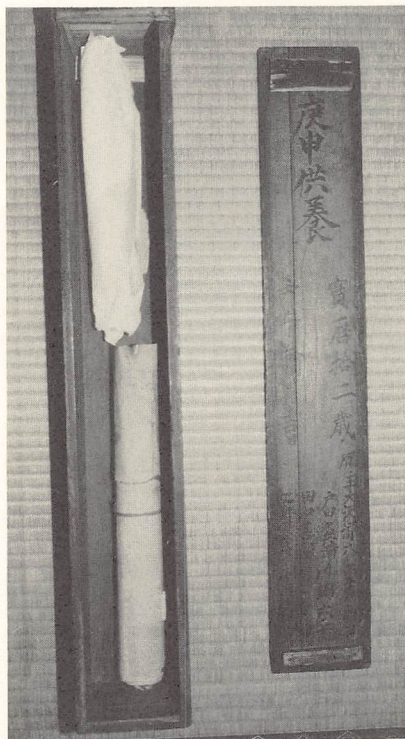
天帝にその罪科を報告するといわれている。そのために、60日に1度訪れる庚申の夜を一夜眠らずにこの虫を見張っているのだ。」というような話は、誰もが初めて耳にすることであつらしく、こちらの方が面食らってしまった。

つまりは、庚申の日に夜を徹して身を慎む行事が本来の姿であったが、近世中期以降に庚申講が広まると無病息災を祈る対象として青面金剛が登場したり、庚申の夜には講員が集まって飲食する「お日待」としての意味合いが強くなってきて、世間話をするだけの講となったようである。

この講で守ってきた青面金剛の掛軸の箱書きには、

「庚申供養 寶曆拾二歳 壬午 霜月吉日」とあり、

この講が1762年から平成7年の1995年までの200年以上の長きにわたって伝承されてきた行事であることを窺い知ることができる。埼玉県では庚申講が最も盛んだったのが18世紀といわれている。埼玉百塚中組の講のはじまりもちょうどその頃にあ



「庚申供養……」の墨書

たるといえよう。今となっては、当初の講の内容を知る由もないが、何らかの目的をもって集まっていた講も200年の経過とともに「何だかわからないけれど世間話をしていれば良い講」に変容してきたのである。

2 200年を綴る

前述したように、箱書きには「庚申供養 寶曆拾二歳 壬午 霜月吉日」とあり、この講のはじまりを示してくれた。200年の伝承を裏付るように、同箱には毎年の講の実施記録を書き付けた綴りが入っていた。非常に残念なことには、つい何年か前にあまりに傷んでいる古い文書を廃棄してしまったということで、現在残されている文書のうちで最も古い記録は、明治38年（1905）のものになってしまっている。

この綴りの各々には、当年の何月にオカノエ講があったかを記録してあり、その時のヤドの名も記されている。ということは、1年のうち何回の講があったかも自ずと知るところになる。

なかには1年に8回もの集まりをもっている年があり、こうなると60日に1度巡ってくる、庚申の日に限ってはいないという計算になる。「申の日に講員の数だけやる。」という調査結果もあるように、「申」にだけこだわったのかもしれない。

この綴りを表にして次頁以降に掲げた。

講員の名については、英字の頭文字で記すにとどめた。これを見ると多いときには8軒もの講員の家があったのに、徐々に少なくなっていくことがわかる。「最も盛んな時期に11人の講員がいた」とはこのころを指すのだろうか。今のように転居が当たり前の時代ではなく、ましては土地とのつながりが強い地域のことでは、終わり間際に4軒に減ってしまったことは、「衰退」という表現が相応しいものに思われる。

聞き取り調査の中で、「食い講なので、戦後抜けた人が多かった。」という話があったように、昭和12年に8軒あったものが昭和25年には6軒に減っている。農家でない家は、戦時中にヤドを引き受けるのが大変だったようである。

平成6・7年はわずか4軒の講員となり、今回の終わりを決断させる原因ともなった。

綴りをめくっているうちに、明治期から昭和の初期までの記録は和紙に墨書きであったのに、次第に半紙や障子紙が使われ、ボールペン・サインペンが登場するなどの変化を感じることができた。100枚の綴りは、間違いなく100年の時の流れなのである。



寄贈された庚申講掛軸

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	年間回数	講 中
1905年(明治38年)		○				○		○		○		○	5	K.S.S.T.T家
1906年(明治39年)		○		○			○		○		○		5	K.S.S.T.T家
1907年(明治40年)	○		○					○		○		○	5	K.S.S.T.T家
1908年(明治41年)		○				○		○		○		○	5	K.S.S.T.T家
1910年(明治43年)	○		○		○		○		○	○			6	K.O.S.S.T.T家
1911年(明治44年)	○		○		○		○		○		○	○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1912年(明治45年)			○	○			○	○		○	○	○	7	〃
1913年(大正2年)		○		○			○	○		○	○	○	7	〃
1914年(大正3年)	○	○		○		○		○		○	○		7	〃
1915年(大正4年)		○	○	○			○		○		○		6	I.K.O.S.T.T家
1916年(大正5年)	○		○	○			○		○		○	○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1917年(大正6年)		○		○			○	○		○	○	○	7	〃
1918年(大正7年)		○	○	○			○		○		○		6	I.K.O.S.S.T家
1919年(大正8年)	○	○	○	○			○		○		○	○	8	I.K.O.S.S.T.T.T家
1920年(大正9年)		○	○	○			○		○	○		○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1921年(大正10年)		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1922年(大正11年)		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1923年(大正12年)	○		○	○			○		○	○		○	7	〃
1924年(大正13年)		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1925年(大正14年)		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1927年(大正16年)		○	○	○			○		○		○	○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1928年(昭和3年)		○	○		○		○		○		○	○	7	〃
1929年(昭和4年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	I.K.O.S.S.S.T.T家
1930年(昭和5年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1931年(昭和6年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1932年(昭和7年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1933年(昭和8年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1934年(昭和9年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1935年(昭和10年)	○	○			○		○		○	○	○	○	8	〃
1936年(昭和11年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃

※1927年は、「大正16年」となっていた。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	年間回数	講 中
1937年(昭和12年)	○		○		○		○		○	○	○	○	8	I. K. O. S. S. S. T. T家
1938年(昭和13年)	○		○		○				○	○	○	○	7	I. K. O. S. S. T. T家
1939年(昭和14年)	○		○	○			○			○	○	○	7	〃
1940年(昭和15年)	○		○	○			○			○	○	○	7	〃
1941年(昭和16年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1942年(昭和17年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1943年(昭和18年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1944年(昭和19年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1945年(昭和20年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1946年(昭和21年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1947年(昭和22年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1948年(昭和23年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1949年(昭和24年)	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1950年(昭和25年)	○		○		○					○	○	○	6	I. O. S. S. T. T家
1951年(昭和26年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1952年(昭和27年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1953年(昭和28年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1954年(昭和29年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1955年(昭和30年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1956年(昭和31年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1957年(昭和32年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1958年(昭和33年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1959年(昭和34年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1960年(昭和35年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1961年(昭和36年)	○		○		○					○	○	○	6	〃
1962年(昭和37年)	○		○	○					○		○	○	6	I. O. O. S. T. T家
1963年(昭和38年)	○		○	○					○		○	○	6	〃
1964年(昭和39年)	○		○	○					○		○	○	6	〃
1965年(昭和40年)	○		○	○					○		○	○	6	〃
1966年(昭和41年)	○		○	○					○		○	○	6	〃
1967年(昭和42年)	○		○	○					○		○	○	6	〃
1968年(昭和43年)			○	○					○		○	○	5	I. O. O. S. T家

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	年間回数	講 中
1969年(昭和44年)			○	○					○		○	○	5	I. O. O. S. T家
1970年(昭和45年)			○	○					○		○	○	5	〃
1971年(昭和46年)			○	○					○		○	○	5	〃
1972年(昭和47年)			○	○					○		○	○	5	〃
1973年(昭和48年)			○	○					○		○	○	5	〃
1974年(昭和49年)			○	○					○		○	○	5	〃
1975年(昭和50年)			○	○					○		○	○	5	〃
1976年(昭和51年)			○	○					○		○	○	5	〃
1977年(昭和52年)			○	○					○		○	○	5	〃
1978年(昭和53年)			○	○					○		○	○	5	〃
1979年(昭和54年)			○	○					○		○	○	5	〃
1980年(昭和55年)			○	○					○		○	○	5	〃
1981年(昭和56年)			○	○					○		○	○	5	〃
1982年(昭和57年)			○	○					○		○	○	5	〃
1983年(昭和58年)			○	○					○		○	○	5	〃
1984年(昭和59年)			○	○					○		○	○	5	〃
1985年(昭和60年)			○	○					○		○	○	5	〃
1986年(昭和61年)			○	○	○				○		○	○	6	I. O. O. S. S. T家
1987年(昭和62年)			○	○					○		○	○	5	I. O. O. S. T家
1988年(昭和63年)			○	○					○		○	○	5	〃
1989年(昭和64年)			○	○					○		○	○	5	〃
1990年(平成2年)			○	○					○		○	○	5	〃
1991年(平成3年)			○	○					○		○	○	5	〃
1992年(平成4年)			○	○					○		○	○	5	〃
1993年(平成5年)			○	○					○		○	○	5	〃
1994年(平成6年)			○	○					○			○	4	I. O. S. T家
1995年(平成7年)			○	○					○			○	4	〃

掛軸そのものは、一般的な青面金剛の図柄で「日月 青面金剛 三猿 鶏」等が描かれている。「青面金剛は庚申の本地なりといひ、また帝釈天の使者なりという。その身体は青色にして六臂あり、弓・箭・寶劍を執り、怒髪にして両足に一鬼を踏むを形にす。」というそのものの構図である。紙本着色で、本紙だけでなく表装自体にかなりの傷みがあり、右の軸頭も欠失している。本紙に「西川重信」の落款があるが、この絵師については宝暦年間に西川佑信（1671～1750）という絵師が活躍しており、その門下の西川姓の者あるいは重信名の者かと考えたが特定できなかった。

箱蓋裏の墨書は、以下のとおりである。

「庚申供養 寶暦拾二歳
壬午 霜月吉日
願主 大沢源六 栗原新六
戸田久兵衛 川鍋六平
田口甚之丞 小沢平太
柴崎源右門 』

小沢平太とは、小沢家の当代から数えて9代前の祖先であるという。

3 行事の終息

最後のオカノエ講は、平成7年11月25日に行なわれた。

この日は、夕方からヤドとなった小沢氏の家で講員4人が集まった。手打ちうどんに天麩羅・煮物という精進料理が用意され、青面金剛の掛け軸にも灯明とともにそれらの料理が供えられた。

「お茶のみ講」であるから、世間話をしながら時を過ごした。ここでの講について少し話を聞いたあとに、一般的な事例についてもあらためて話をした。

つまりは、「人間の身体に三尸という虫がいるということ。その虫が、人のすべての行動を見て、庚申の夜に天帝にその罪科を報告するのを防ぐために庚申の夜は眠らずに起きているのだということ。」である。行事を終息するとはいえ、これまで講の目的をまったく知らずに実施してきたので、多少なりともその歴史的な意味合いを知っていただく良い機会であった。



オカノエ講の様子



用意された精進料理

一同は思い出話をしながら時間を過ごし、精進料理をいただいた。幸いなことに当夜は地震がなく、ヤドのやり直しをすることもなかった。

最後の頃には、自分たちの代で行事を断つことへの無念さと、掛け軸が将来消失しなくてもすんだという安堵感のようなものがあり、和やかなうちにお開きとなった。

掛け軸は、後日日を改めて当館に寄贈された。

伝統的な行事は、その運営に行き詰まる地域も少なくないが、かといってこれまで連綿と継承されてきたものを簡単に断ち切ることにもまた抵抗があるものである。今回の調査では、伝統的な行事の最後に立ち合えたことで、その継続の難しさを痛感した。今後、この掛け軸を活用する機会はあまり得られないかもしれないが、「保存」の形で継承していきたいものである。

当館に掛け軸を寄贈してくれるにあたって、外箱を新調し真新しい墨書まで記された。その箱書きには、

「庚申供養 平成七乙亥歳 十二月吉日

願主 石井久夫
柴崎一郎
小沢由五郎
田口荘七郎

箱作 小沢義政

記録 小菅峻道

」

とあった。



掛軸にも精進料理が供えられている



オカノエ講の様子